

市民団体による琵琶湖における外来魚対策

琵琶湖を戻す会 代表 高田 昌彦

1. はじめに

私たち琵琶湖を戻す会は市民団体ではありませんが、自分たちにできる範囲で琵琶湖の外来魚対策に取り組んできました。私たちがどのような形で琵琶湖の外来魚問題と向き合っているのかを、琵琶湖を戻す会の活動を通して紹介します。

2. 琵琶湖を戻す会とは

ブラックバス（オオクチバス）やブルーギルといった外来魚は、1980年代には日本全国で発見されるようになり、1990年代後半になると外来魚問題がテレビや新聞などでもさかんに報道されるようになりました。そしてその象徴として常に琵琶湖が大きく取り上げられていました。

“日本の淡水魚の聖地”とも言われている琵琶湖の豊かな在来魚が年々外来魚に置き換わっていく様を見てきた淡水魚（特に“雑魚”）をこよなく愛する私たちが、「琵琶湖の外来魚を何とかしなければ」と思い立ったのもこのころです。活動の場に琵琶湖を選んだのは、琵琶湖が日本一の湖だからでした。他の場所で何らかの成果を上げられても「その水域だからできた」と言えますが、それが琵琶湖となると「琵琶湖でもできたのだから」と、他の水域への模範になるのではと考えたからです。

ところがいざ外来魚を駆除しようと湖岸に立って幾度となく釣り竿を出してはみたものの、無尽蔵に釣れ続けてくる外来魚の数に圧倒されてしまいました。所詮仲間内で駆除できる量などたかが知れています。そこで、外来魚問題を解決するには遠回りのようでもこの問題を広く社会に伝えることが先決だと思い至りました。当時、琵琶湖の外来魚問題は報道されてはいたものの、まだ社会にまで浸透してはいなかったからです。

そこでまずは一般公募をして外来魚駆除大会を開催することにしました。開催するにあたり、主催団体の必要性を感じて「琵琶湖を戻す会」を設立しました。「琵琶湖を外来魚がいなかったころに戻したい」との願いからの命名でした。2000年春のことです。



琵琶湖を戻す会の
シンボルマーク

3. 外来魚駆除大会

琵琶湖を戻す会設立の翌年からは、年4回（春2回・秋2回）の外来魚駆除大会を定期開催するようになりました。会場の目印になるよう「外来魚駆除」と書かれた大きなノボリ旗も作成しました。この旗は私たちの決意の表れでもあります。



初めて定期開催した外来魚駆除大会（2001.4.1）

外来魚駆除大会には当初からこだわりがありました。それは「のべ竿、玉ウキ、ミミズ餌」という釣り方です。かつて琵琶湖やその周辺には雑魚などを捕って食べる“おかずとり”という文化があり、さらにポテジャコやハイジャコなどの雑魚は子どもたちの格好の遊び相手でもありました。その当時の釣り方といえば、藪から切り出した竹竿に簡単なウキを付けて掘り出したミミズをエサにしたものでした。今、かつて雑魚釣りをしていたそのような釣り方で、同じように琵琶湖の湖岸に立って竿を出しても外来魚しか釣れません。その現実を実感してもらいたかったからです。なので、今流行の外来魚を釣るためのリールやルアー（疑似餌）などは使っていません。

外来魚駆除大会もこの14年間で60回を数え、この間にのべ一万人を超える参加者があり、3.7トンを超える外来魚を駆除してきました。



1尾ずつの積み重ねが270kgになったことも(2010.5.30)

私たちの活動は「1尾でも多く駆除すること」よりも、「一人でも多くの理解者を増やすこと」に軸足を置いていますので、駆除量よりも参加者数が増えることにやりがいを感じています。特に近年は企業などが職場単位で参加されることが多くなり、毎回100人を超える参加者があります。そしてその7割以上が新規参加者であり、琵琶湖の外来魚問題を知る裾野が毎回広まっていることを実感しています。

4. 琵琶湖外来魚駆除の日

「5月最終日曜は琵琶湖外来魚駆除の日」をキャッチフレーズに、毎年5月末の日曜日に滋賀県立琵琶湖博物館前の広場で、「琵琶湖外来魚駆除の日」というイベントを開催しています。「楽しみつつもみんなで琵琶湖の外来魚問題を考える日にしたい」との思いで、多くの団体の協力によって外来魚に関する様々なイベントを準備しています。

第12回目を迎えた昨年（2013年）の琵琶湖外来魚駆除の日を例に、その内容を紹介します。

<外来魚駆除大会>

ここでもメインとなるのはこの外来魚駆除釣りです。釣りを通して「いかに琵琶湖に外来魚が多いのか！」を実感してもらっています。昨年は600人を超える参加者がありましたが、第9回「琵琶湖外来魚駆除の日」のように一日で1000人近い参加者があったこともありました。



湖岸には多くの参加者が並びました(2013.5.26)

<琵琶湖の幸の試食会>

琵琶湖の在来魚の美味しさを知ってもらおうと、在来魚の料理をふるまっています。第1回より守山湖岸振興会の協力によって実施している毎年好評のイベントで、昨年はコアユの天ぷらでしたが揚げたてサクサクの天ぷらに長蛇の列ができていました。



コアユの天ぷらに並ぶ参加者の列(2013.5.26)

<外来魚の試食会>

「ブラックバスを食べて駆除しよう」と活動している“BBcooking”という若者のグループの手によるブラックバスのムニエルを食べてもらいました。ブラックバスの切り身を丁寧に調理したことでとても美味しい一品となり、こちらもあっという間になくなってしまいました。



試食に出されたブラックバスのムニエル(2013.5.26)

<電気ショッカー船の実演>

滋賀県水産課の特別な計らいによって、前年に琵琶湖に導入された電気ショッカー船「雷神号」による駆除活動の実演が行われました。目の前で40cmを超える大型のブラックバスが次々と駆除される様に、参加者からは驚きの声が上がっていました。



雷神号の実演と捕れたブラックバス(2013.5.26)

<地引き網体験>

網ではどんな魚が捕れるかを見てもらおうと、多くの子どもたちに地引き網を体験してもらっています。滋賀県漁業協同組合連合青年会の協力によって網を準備していますが、会場周辺は水深があり地引き網には適さないのでもあまり捕れません。それでも捕れる魚のほとんどが外来魚であることを実感してもらっています。



地引き網の参加者と捕れた外来魚 (2013.5.26)

<外来魚の解剖教室>

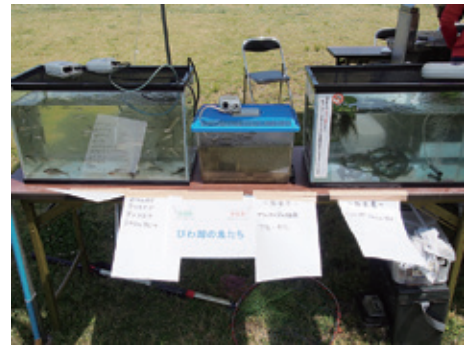
参加を希望した子どもたち自身の手で外来魚を解剖し、「ブラックバスがどんなものを食べているのか」や「どれくらいの卵を産むのか」などを滋賀県水産試験場の指導により見てもらっています。胃袋の中から大きな魚やルアーなどが出てくるたびに驚きの声があがっていました。



熱心にブラックバスを解剖する子どもたち(2013.5.26)

<在来魚と外来魚の比較展示>

琵琶湖博物館うおの会の協力で、多種多様な琵琶湖の在来魚とそれに置き換わったたった2種類の外来魚とを並べて比較展示しています。さらに、この時期に琵琶湖岸でたくさん見られるブラックバスの稚魚も毎年展示しています。



琵琶湖の在来魚と外来魚の比較展示(2013.5.26)

5. エリ漁体験

毎年7月下旬に漁師さんの船に乗って琵琶湖の伝統漁でもある「エリ漁」の「ツボ上げ」という作業を体験してもらっています。真夏の琵琶湖クルーズはいつも好評で、毎年定員いっぱいの申し込みがあります。



エリ漁体験に出港する前の参加者(2013.7.21)

沿岸に仕掛けられたエリ(定置網)のツボと呼ばれる部分に入って網を引き上げると、毎年たくさんの小魚が捕れるのですが、ここでも捕れる魚のほとんどが外来魚で、時にはビックリするような大きなブラックバスが入っていることもあり、参加者を驚かせています。



ツボ上げを体験する参加者 (2013.7.21)

エリ漁体験が終わると近くの浜に移動して、地引き網を体験してもらいます。ここでも網に入るのは外来魚ばかりで、今の琵琶湖南部ではどのよ

うな方法でも外来魚しか捕れない現状を実感してもらっています。

6. 外来魚情報交換会

琵琶湖を戻す会の活動趣旨は“外来魚問題の啓発”にあることから、全国各地で行われている外来魚駆除活動の事例を琵琶湖周辺の外来魚に関心のある人たちにも知ってもらおうと、全国の現場から担当者を招いて事例紹介し討論する場として2002年から4年間に渡って「琵琶湖外来魚シンポジウム」を開催してきました。その後、2003年に滋賀県がレジャー条例（滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例）を、2005年に国が外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）を施行したことなどあって、外来魚問題は飛躍的に社会に浸透するようになりました。

そこで琵琶湖を戻す会の活動も「外来魚問題の啓発」から「いかに外来魚を駆除するか」へと一歩踏み出すことにしました。とは言うものの、琵琶湖を戻す会は素人集団であり、本格的に外来魚を駆除する知識も経験もありません。そこで、日本全国の外来魚防除の現場などから研究者、学者・学生、行政担当者から漁業者、一般市民まで、立場を問わずに広く外来魚に関する情報を持ち寄ってもらい、情報交換や人の交流ができるような場を設定することならできると考え、2006年から「外来魚情報交換会」として、新たにスタートしました。“その情報、共有しなきゃもったいない”をキャッチフレーズに毎年オフシーズンとなる冬場に開催し、今年も2月1日・2日に第9回「外来魚情報交換会」を開催することになりました。

毎年のように日本全国から100名前後の参加者が集まり、「日本で唯一の外来魚情報が集約される場」として活用してもらっており、これまで開催してきた中から地域を越えた様々な交流も生まれています。中でも毎年のように北海道職員の方から情報提供されていた“電気ショッカーボート”による駆除事例報告から滋賀県の担当者との交流に発展し、さらに琵琶湖への導入へと繋がりました。このように外来魚情報交換会がきっかけとなって、琵琶湖での電気ショッカー船導入とその後の大きな成果への一助となれたことを、とても光栄に感じています。



ほぼ満席となった外来魚情報交換会会場(2013.2.2)

7. おわりに

琵琶湖を戻す会はその時の状況によって活動内容を見直してはいますが、私たちの活動の中心が外来魚駆除大会であることに変わりありません。そして参加者の大半が小さな子どものいる家族連れであることも当初より変わりありません。参加してくれる子どもたちは一生懸命外来魚を釣って駆除してくれますが、彼らが産まれた時から琵琶湖はすでに“外来魚だらけ”であり、彼らの多くは「外来魚を駆除して守るべきものの姿」を知りません。このままでは彼らにとって「外来魚駆除が目的」にもなりかねません。



駆除大会参加者の多くが子どもたちです(2012.4.22)

外来魚の少ない琵琶湖周辺の水路や河川には、まだまだたくさんの在来の小魚や雑魚が見られます。そしてその多くは、かつて外来魚が大増殖するまで琵琶湖の湖岸を泳ぎ回っていた魚たちです。子どもたちにはまずそのような場所で琵琶湖本来の在来魚に触れてその豊かさと素晴らしさを実感してもらい、琵琶湖の在来魚の復活がまだ手遅れではないことをわかった上で外来魚駆除活動に参加してもらえるような工夫も必要ではないかと感じています。

外来魚を駆除しただけでは在来魚は戻ってきませんが、外来魚を駆除しなければ絶対に戻ってこないことを一人でも多くの人たちに知ってもらえるよう、今後も活動に励みたいと思います。